

フランスにおけるヴァカンスの地理学的研究

高橋伸夫

- | | | | |
|------|----------------|-------|-----------------|
| I | はじめに | III | フランス人の外国でのヴァカンス |
| II | ヴァカンスの諸特性 | III-1 | 外国におけるヴァカンス |
| II-1 | ヴァカンスの諸相 | III-2 | 外国における滞在場所 |
| II-2 | ヴァカンスの滞在場所・日数 | III-3 | 外国におけるヴァカンスの諸相 |
| II-3 | ヴァカンスの宿泊施設 | IV | むすび |
| II-4 | ヴァカンス享受率の地域的差異 | | |

I はじめに

人間は二つの相反する性行を有している。哲学者のM.ハイデガーは「彷徨, errance」と「定住, habiter」を指摘している。

「定住」は、長期にわたって恒常的に安定性を望むことによる。この定住性は、たとえば地表を開発する文化を生じ、農業社会や鉱山都市などを生じさせてきた。それに対して、彷徨は変化や冒険を求めるものであり、真理の非時間的な探求を望み、世界においては遊牧生活や商業活動、あるいは文化の地域間交流などを生じしめてきた。

自宅を離れることの定住化した都市化社会における観光業は、さまざまな形態からなり、彷徨と定住、すなわち「周遊」と「滞在」との多様な統合状況を誕生させている。

二つの概念のまず第一の基本的な差異は、都市文化が発展する地方では、生活する人間による流動性が主要な住宅を所有し、居住することの恒常性が別荘所有へと移行することである。とくにフランスの場合、心理的にみても経済的にみても、人びとの別荘を所有するという希求は強い。

一方、社会が高度化するに伴って、余暇・観光業は人びとの間に普及するようになってきている。「トラヴァイユ (travail)」というフランス語が存在する。この「労働」を意味する語は、ラテン語では、“tra”は、「三つ」という意味からなり、“vail”は「杭」なる意味をもつため、二つの語を合成して「三つの杭」という意に相当する。三つの杭はあばれまわる家畜を雁字搦めにする状況を示していた。そのため、「トラヴァイユ」も現在、労働・仕事という意味の他に、苦痛・骨折などの意味を残している。この語源からも理解できるように、フランス人をはじめとするヨーロッパ人は、労働からの開放に対する希求が、古い時代から強かった。

余暇のさまざまな楽しみ方は、19世紀に主としてイギリス人の主導によったが、それは自然への回帰の一つの願望でもあった。第二次世界大戦中に、フランスにおいて、全労働者が休暇をとることができる有給休暇制が世界に先がけて導入された。それ以降、ヴァカンスの期間は少しずつ延長され、今日では5週間になっている。一方、ヴァカンスはかつて上流階級に限られていたが、徐々に大衆化

しつつある。ヴァカンスが普及したフランスでは、山岳部や海岸部での別荘に加えて、近年の傾向として、大都市近郊の農村部に週末の「第二の別荘」も誕生し、マルチ・ハビテーションの時代を迎えようとしている。

そこで本論は、世界でもヴァカンス先進国であるフランスを事例として、そこでのヴァカンスをなるべく多方面から分析しようとするものである。

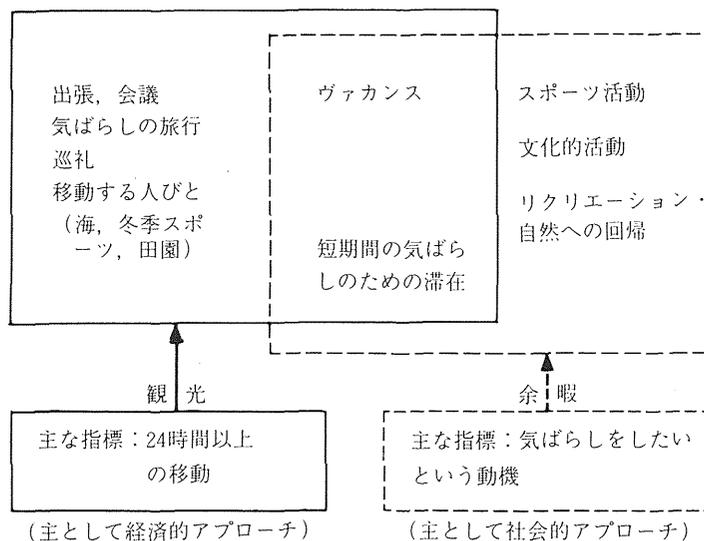
まず最初に、ヴァカンスと観光そして余暇に関して、それぞれの概念を整理しておきたい。

ちなみに、日本の場合、観光とそれに近い概念である余暇について、以下のように示している¹⁾。「観光とは自己の自由時間（＝余暇）の中で、鑑賞、知識、体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為（＝レクリエーション）のうち、日常生活圏を離れて異なった自然、文化等の環境のもとで行なおうとする一連の行動をいう。」

この中にある「余暇」とは、1日24時間の中から、睡眠、飲食、排泄の生理的欲求に基づく時間と、勉強、家事、勤務などに要する業務時間（通勤通学時間を含む）を差し引いた、自分の自由意志によって処理可能な時間を指す。

J.L.ミショは、第1図に示されているように、観光・余暇そしてヴァカンスの三者の関連を図化している。ヴァカンスは、まず第一に余暇にも観光にも一部分が重複するものである。観光の主要な指標は、24時間以上の移動を伴うものであり、この点に関してはヴァカンスも同様なものである。一方、余暇は「気ばらしをしたいという動機」が主要な指標である。この点に関してもヴァカンスは、同様な内容を包含している。したがって、ヴァカンスは観光と余暇の中間に位置している。

フランスでは、夏期のヴァカンスに関しては1965年から、また冬期のヴァカンスについては、1969年から調査がなされている。現在のようなヴァカンスについての調査は、1973年以降行なわれるよう



第1図 ヴァカンスの位置づけ (Jean-Luc Michaudによる)

になっている。調査は年に2回、世帯に対して行なってきた。調査主体は、INSEE（国立統計経済研究所）である。5月に調査する対象は、冬期ヴァカンスであり、10月に実施するのは夏期のものである。

アンケートで使用するヴァカンスの概念は、通常のものとは異なっている。INSEEが調査を行なうにあたって、用いているヴァカンスとは、自宅を離れて少なくとも4泊以上宿泊し、その目的が職務上のことや研究に関すること、そして病氣治療を除いたものである。この定義は、ヨーロッパの他の諸国でも使用されているものである。

ヴァカンスは、広義に使用され、家族で滞在したり、観光地ではない場所に滞在したりしたものをも含む。また、ヴァカンスは業務用の観光は含んでいない点では観光より狭い概念である。

INSEEが調査し、「ヴァカンス白書」が発刊されており、本稿の主要部分はそれに基づいている。その内容は、ヴァカンスへ出発するフランス人はいかなる人であり、ヴァカンスへ出発する人はいかなるほどか、いつ出発し、その日程はいかなるものであるか。あるいは、どこへ出発するのか、どのような宿泊施設を使用するのか等々が質問されている。

アンケートの対象となったのは、約8000世帯であり、調査は全国各地のINSEEによるものである。調査対象世帯は、すべてのヴァカンスの出発と滞在、期間等に関して家族全員になっている。

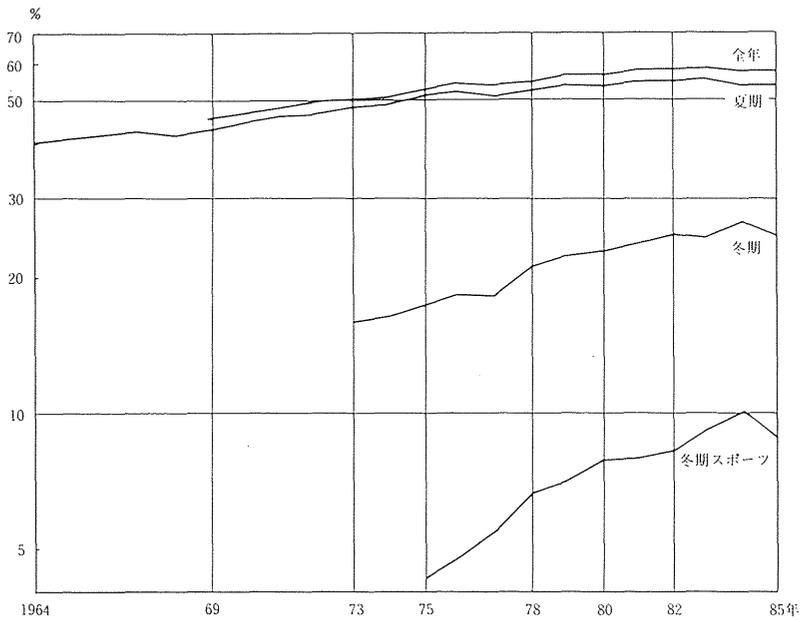
世帯とは、つねに同じ家屋に居住しており、以下のような事例は世帯から除外されている。長い間留守にしている寄宿生、兵役下の軍人、療養所そして養老院、転借人、同居している使用人などである。世帯に関しては、その規模、ヴァカンスに出発する世帯人数、年間所得、ヴァカンス中にフランスあるいは外国において、どの程度出費するかなどが問題となる。

個人に関する質問事項は、性別、年齢、社会的階層、年間所得額中に占める出費、世帯が位置するコミュンなどにわたっている。ヴァカンスの滞在については以下の二つに区分される。その第一は一ヵ所に滞在するものである。このタイプは同じ場所に4泊以上滞在し、固定的なものである。一方、回遊は4日間以上自宅から離れるが、同一個所に3日間以上滞在しないものである。さらに、調査の対象はフランス国内のヴァカンスにとどまらず、外国に滞在するヴァカンスにまでも及ぶ。その際、いかなる宿泊施設を使用するのか、使用する交通手段、旅行の形態、いつから滞在がはじまるのか、あるいは滞在の日数はいかなるものであるかに関して回答したものが集計されている。

II ヴァカンスの諸特性

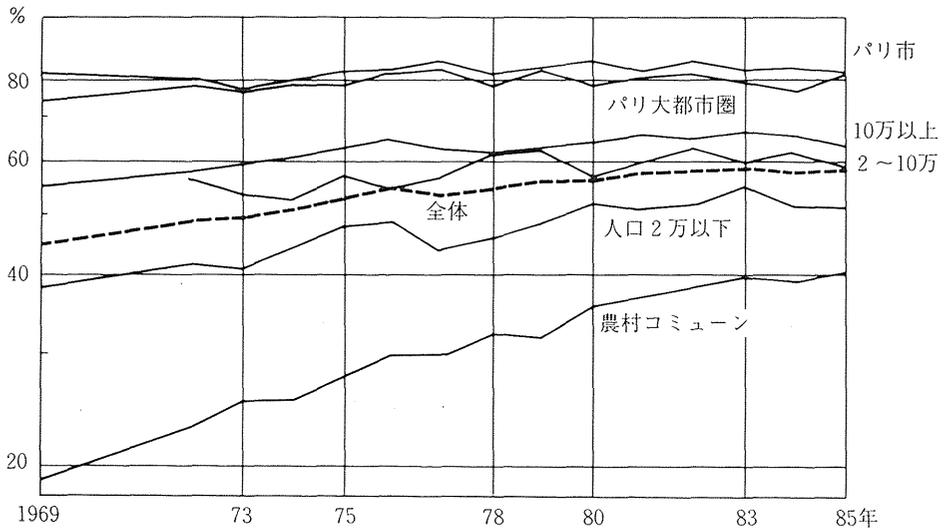
II-1 ヴァカンスの諸相

フランス人がヴァカンスを楽しむ割合は、年々、増大しつつある。第2図にみられるように、1964年時点では、フランスで約45%の人びとが享受していた者が、1985年に至ってほぼ60%に達している。ヴァカンスのうちほとんどが夏期ヴァカンスによるものである。一方、冬期ヴァカンスを楽しむ割合も増加傾向にあり、1984年から85年にかけて減少はするものの、フランス人に冬期ヴァカンスが浸透しつつあることがわかる。さらに、冬期スポーツも人びとの間に急速に普及しつつあることは明白である。1975年時点では、その普及率は5%に達しなかったが、1984年には10%を越えるようになって



第2図 フランスにおけるヴァカンス享受率の年次的変遷

資料：INSEE



第3図 フランスにおける居住地別にみたヴァカンスの享受率の変遷

資料：INSEE

いる。今後、フランス人の冬期におけるスポーツ・ヴァカンスの動向に注目したい。

第1表には、フランス人のヴァカンスの享受率と滞在日数の変遷について、1981年から85年にかけてのものが示されている。夏期ヴァカンスを享受する率は、53～54%で安定しているものの、夏期にヴァカンスを享受する絶対数は、1981年の2840万人から85年の2940万人と微増傾向にある。フランス人1人あたりの滞在日数が、約19日であることは近年の数年間では大きな変動がない。

そして、ヴァカンスの滞り場所、国内が80.9%、それに対して外国が19.1%であり、国内でのヴァカンスの滞りが圧倒的である。しかし、外国でのヴァカンスの滞りも、20%弱を占めており、外国でのヴァカンスも重要視せねばならない。

第4図は、フランスにおいて所得額から見て、ヴァカンスをいかに享受しているかを示している。図からも明瞭に読みとれることとして、当然のことながら、所得額に応じてヴァカンスの享受率が高まることである。例えば、年間所得額20,000フラン以下であると、その享受率は26%しか達しない。しかし240,000フラン以上になると、その享受率は89.8%にも至り、この所得階層に属する人びとはヴァカンスをほとんど享受していることになる。このように、所得額が低い階層はヴァカンスに出かけることができず、一方、その額が高くなれば、ヴァカンスを楽しむことになる。

ヴァカンスの時期は、前述の通り夏期と冬期に集中する。とくに夏期の7月と8月は、まさにヴァカンスの時期となり、2ヵ月間でヴァカンスへ出発するのは、1年間全体のうち、51.2%にも達する。そしてクリスマスの休暇がある12月に7.8%、復活祭の休みがある3月にも、上記の割合は6.9%になる。

外国へヴァカンスのために出発するのは、とくに7月(26.3%)に集中し、7月と8月を合計すると、51.6%と過半数を示すことになる。また、6月にも、上記の数値が8.9%に達する。全体的な傾向として、ヴァカンスを外国に求める割合は、全ヴァカンスのうち、夏期にはピークが早めに訪れる。

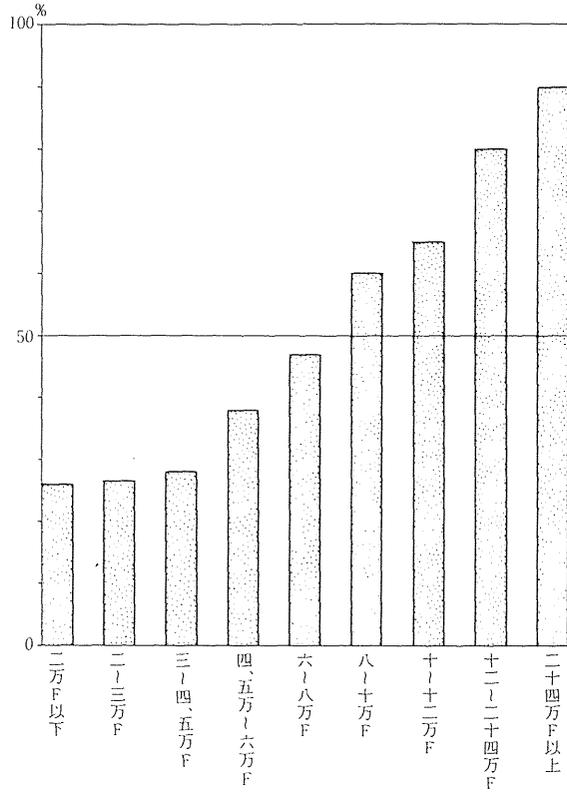
ヴァカンスの出発が集中する6月1日から9月30日までの間の状況は、第6図に示してある。上記の期間のうち、最大のピークは7月15日から7月31日までであり、第2番目が8月1日から3日までであり、それに続くものとして、8月4日から14日までであり、前述の通り、7月15日から8月14日の1ヵ月間にヴァカンスの集中がある。さらにもう一つのピークは、6月28日から7月1日にも存在

第1表 フランス人のヴァカンスの享受率と滞在日数

	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年
夏期のヴァカンス*を享受する人 (単位:100万)	28.4	28.6	29.6	29.3	29.4
夏期にヴァカンスを享受する率 (%)	54.3	54.4	55.2	53.9	53.8
ヴァカンスの滞在日数 (単位:100万)	705.0	706.0	732.0	723.1	722.6
うちフランス	572.0	583.0	608.0	588.3	584.7
外国	133.0	123.0	124.0	134.7	137.9
1人あたりの滞在日数 (日)	19.4	19.1	19.4	19.5	19.0

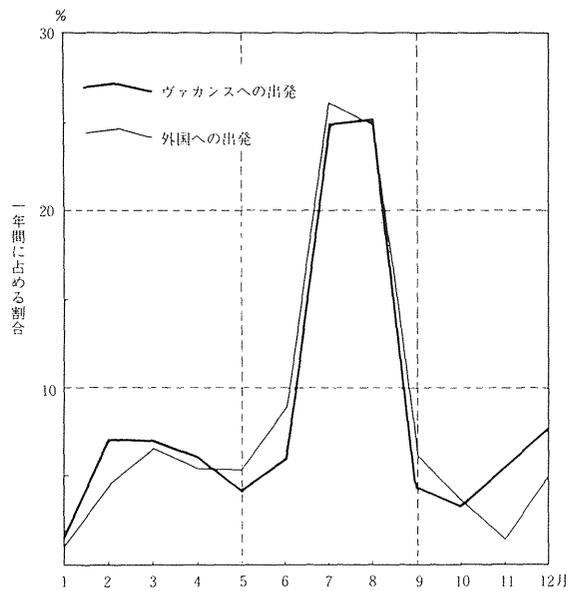
* 5月1日から9月30日まで。

資料: INSEE



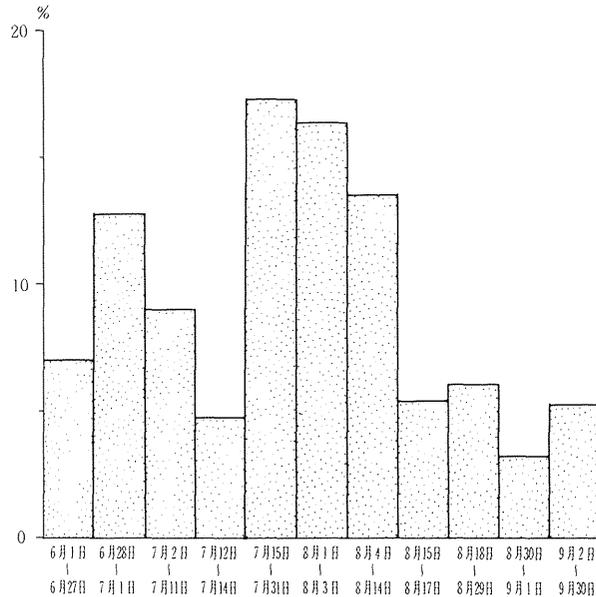
第4図 フランスにおける年所得水準に応じたヴァカンス享受率 (1985年)

資料：INSEE



第5図 フランスにおける月別ヴァカンスの滞在 (1984・85年)

資料：INSEE



第6図 フランス人の夏期ヴァカンス（6月1日～9月30日）への出発

資料：INSEE

する。このように、いくつかのピークが存在するものの、ヴァカンスは6月下旬から8月下旬の2ヵ月間に集中することがわかる。

ヴァカンスを享受する者の年齢についてみると、14歳未満の若年層と30歳から39歳までの中年層がヴァカンスを享受する割合が高い。1961年以降、享受率はすべての年齢層に対して増大傾向を示し、ただしその変化は一様でない。たとえば、70歳以上の高齢化層の享受率は18%から34%までに上昇した。すなわち、ヴァカンス現象においても高齢化社会が反映している。

1974年までの時点では、年齢層からみると25～29歳層が全体の中で最高を示していた。1975年以降になると、30～39歳層が中心的なものに移行した。すなわち、30～39歳層が1961年時点では44%であったものが、1985年には65%に達した。同様に14歳未満の若年層も伸びている。この年齢構成比の変容によって、ヴァカンスが家族単位でなされている動向を把握することができる。

II-2 ヴァカンスの滞在場所・日数

本項では、ヴァカンス中にいかなる場所に滞在するか、その日数はいかなるものであるかを検討してみる。

第2表は、ヴァカンス中の滞在場所と宿泊場所を掲げている。滞在場所は、海岸、農村、山岳の個所に集中する。とくに、海岸部でのヴァカンスに人気が集まる。海岸部に滞在する者のうち、「両親・友人の家屋」の割合が8.2%にも達して、著しく高い。全体的にみて、ヴァカンス中の滞在場所として、「両親・友人の家屋」の占める割合が34.1%にも達し、全体の3分の1以上を占めて圧倒的に高い。

第2表 フランスにおけるヴァカンス中の滞在場所と宿泊場所（1985年）

(単位：%)

	回遊	海岸	山岳	農村	都市	全体
ホテル	1.3	2.3	3.9	0.9	0.8	9.2
賃貸宿泊施設		6.4	6.0	1.2	0.2	13.8
別荘		3.7	2.2	4.7	0.2	10.8
両親・友人の家屋	0.7	8.2	3.8	13.9	7.5	34.1
両親・友人の別荘	0.1	4.2	2.9	3.0	0.2	10.4
テント・キャラバン	1.2	7.9	1.9	1.9		12.9
その他	0.4	3.0	3.8	1.2	0.4	8.8
合計	3.7	35.7	24.5	26.8	9.3	100.0

資料：INSEE

第3表 フランスにおけるヴァカンス中の滞在場所と交通機関（1985年）

(単位：%)

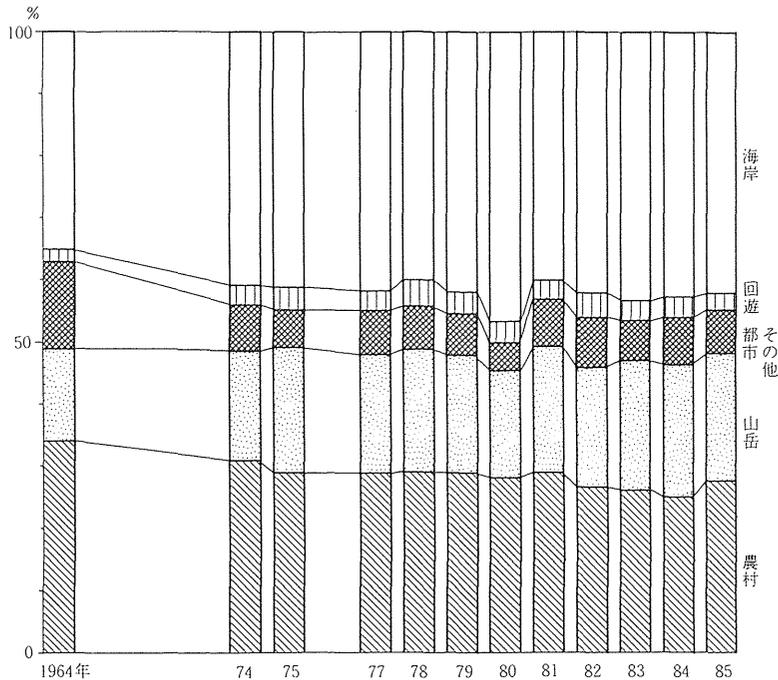
	鉄道	自動車	バス	飛行機	船舶・その他	合計
回遊	5.1	76.0	7.0	3.2	8.7	100.0
海岸	10.5	82.1	1.6	4.4	1.4	100.0
山岳	14.6	78.4	5.3	0.7	1.0	100.0
農村	13.0	82.8	1.7	1.1	1.4	100.0
都市・その他	30.0	63.7	0.9	4.5	0.9	100.0
合計	13.8	79.5	2.7	2.6	1.4	100.0

資料：INSEE

その他、宿泊施設として、10%台を示すのは、「賃貸宿泊施設」、「テント・キャラバン」、「別荘」、「両親・友人の別荘」であり、非常に多岐にわたっていることがわかる。ヴァカンス制度の長い歴史をもつフランスにおいては、ホテルでの宿泊が相対的に低いことがわかる。一方、農村部において、「両親・友人の家屋」がかなり普及しており、都市住民が異なった環境を求めて、里帰りする様相もうかがえる。他方、ヴァカンス中に回遊する割合はきわめて低率であり、日本の休暇での行動と著しく異なっている。

第3表は、ヴァカンス中に用いる交通手段が滞在場所ごとに集計されている。使用する交通機関としては、自動車が圧倒的な割合で、全体のほぼ80%に達する。とくに、海岸・農村部への移動には、自動車が重要な役割を果たしている。また、鉄道使用も13.8%を占め、「都市・その他」への旅行に比率的に高い割合を示している。その他目立つ現象として、「船舶・その他」が回遊に使用される割合が高く、バスが回遊と山岳部への交通手段として多く使用されている。外国でのヴァカンス滞在中には、当然のこととして飛行機利用が高率を占め、1985年には32.3%であり、自動車利用も44%に達し、さらに鉄道利用は13.5%である。

次に、ヴァカンス中の滞在場所の経年変化についてみると、概観して、1964年から20年後の1985年までの間、大きな変化はない。しかしわずかな変容が生じている。その第一には、農村部での滞在は



第7図 フランスにおけるヴァカンスの滞在場所の経年変化

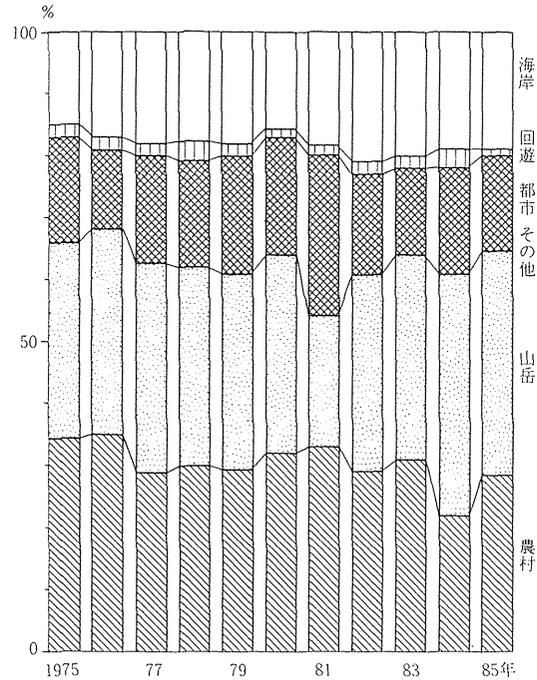
資料：INSEE

減少傾向にあり、一方、海岸部での微増が続き、同様に、山岳部での滞在もわずかながら増加傾向にある。それに対して、回遊型のヴァカンスや都市部に滞在する都市型ヴァカンスの割合は、つねに低い割合を占めてきた。

冬期ヴァカンスの滞在場所を経年的にみると（第8図）、冬期ヴァカンスに冬期スポーツ旅行も含まれるため、山岳部での滞在が圧倒的である。同様に、海岸部での滞在も微増の傾向にある。その一方、冬期には農村部での滞在が微減しつつある。

冬期ヴァカンスは、主として夏期のものの補完的なものとして発達してきた。その結果、一年間に夏期のみならず冬期の休暇という2つの休暇が生じるようになってきた。冬期ヴァカンスを享受した約84%の人間は、前年の夏期ヴァカンスを楽しんでいる。現在のところ冬期ヴァカンスの期間は夏期ヴァカンスに比較すると短いものである。すなわち、冬期のものは平均して1人あたり14日間であるが、夏期のそれは約25日間になっている。

夏期・冬期ヴァカンスに関して、県別の入込客数を考察してみる（第9図）。まず、夏期ヴァカンスの入込客数の地域的分布を図化した結果、多数の入込客数を示す県を類型化すると、以下の3つの類型化が可能である。第1には、ビスケー湾に沿う諸県である。ブルターニュ地方のフィニステール県からはじまり、さらに、ヴァンデそしてシャラント・マリタイム県に至る地方である。第2の類型は地中海沿岸地方であり、とくにピレネー・オリエンタル県の西端からはじまり、多数の入込客を収容するのは、エローそして地中海東部のヴァルとアルプ・マリタイム県に至る地帯である。勿論、夏



第8図 フランスにおける冬期ヴァカンスの滞在場所の経年変化

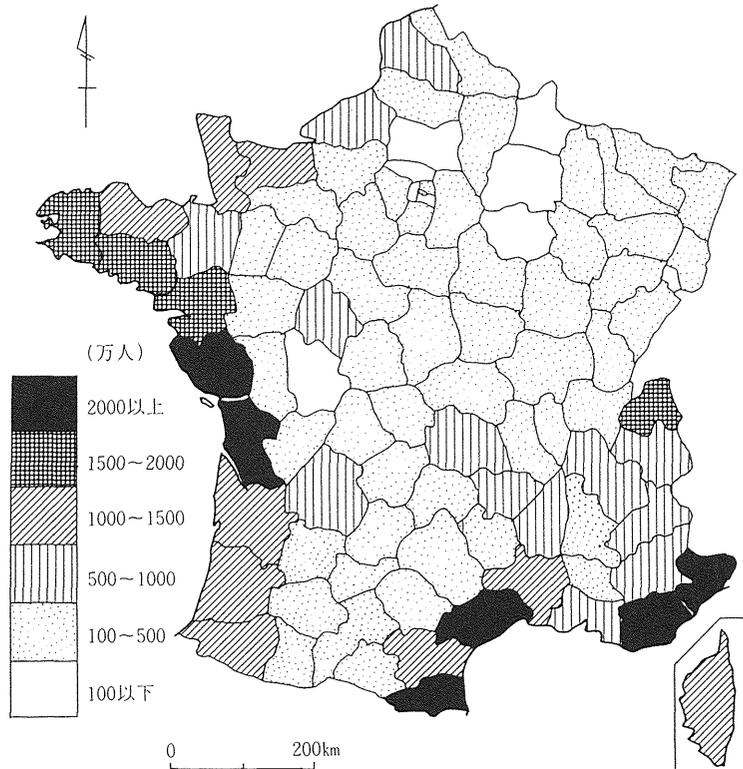
資料：INSEE

期の日照時間の長い気候下で、海水浴を楽しむ人びとが集中する。この類型には、地中海にうかぶコルシカ島も含まれる。第3の類型は、アルプスの山麓に位置する諸県であり、就中、オート・サボア県を中心としている。この三つの類型に続いて入込客数がそれほど多くないが、イギリス海峡に面している諸県がある。ソム、セース・マリタイム両県を中心とする諸県である。

上記の類型からわかるように、地中海沿岸、ビスケー湾沿岸そしてイギリス海峡に面した沿岸には、夏期ヴァカンスとして人びとが集中する。この海岸滞在型に加えて、アルプス山麓のように山岳滞在型も存在する。

第10図は県別に冬期ヴァカンスの入込客数を示している。この地図も特徴的な様相を表現している。入込客の大多数は、オート・サヴァア県からジロンド県にわたる東西に引かれる線の南側に集中する。この図の分布においても、地中海沿岸のアルプ・マリタイム県とヴァル県に集中し、ビスケー湾に面するバス・ピレネー県やジロンド県などの諸県が含まれる。以上の海岸滞在型に加えて、山岳滞在型が表れている。サヴォア県、さらにはイゼール県とオート・アルプ県に多数の入込客が集中する。一方、ピレネー山脈に近接するバス・ピレネー県、オート・ピレネー県、オート・ガロンヌ県にも冬期のスポーツと関係して、入込客が流入する。

総じて、冬期ヴァカンスに関しては、フランスの北半分の地方から、南半分の地方へと人びとの南下移動がみられる。いずれにしても、フランスには1年間を周期とするヴァカンスによる移動が各地において生じている。



第9図 フランスにおける県別夏期ヴァカンスの入込客数（1985年）

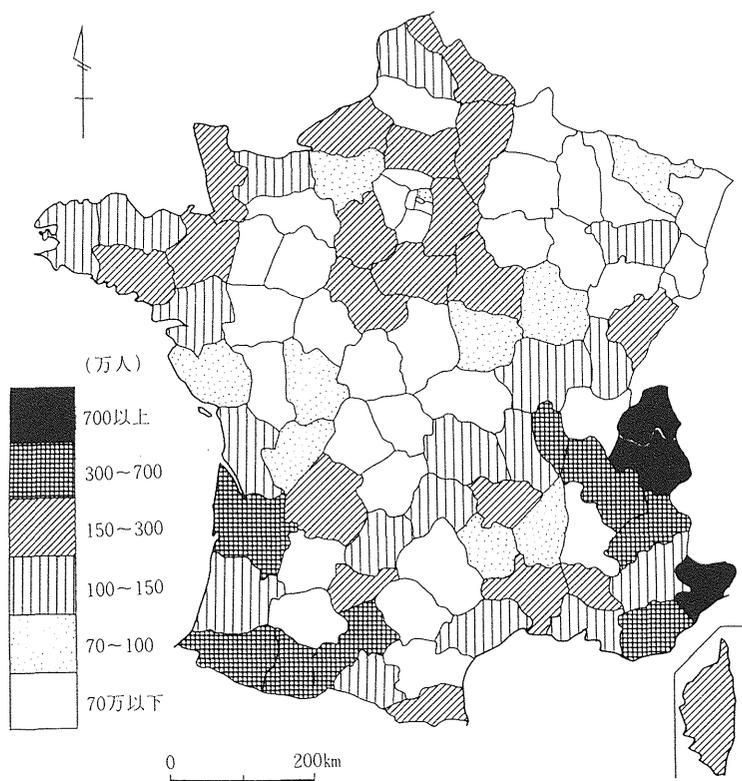
資料：INSEE

次に、職業別にみたヴァカンスの滞在日数に関してみる（第11図）。まず、全体の滞在日数は、きわめてわずかであるが、微減の傾向にある。しかし、日本と異なって、全体の平均としてヴァカンスが30日に達しているという事実が存在する。

フランスにおいては、職業別にみてヴァカンスの滞在日数が著しく異なる点にも特色がある。管理職と中間管理職は全体の平均値を上まわり、他方、会社員、労働者、経営者（本稿では、中小企業・商店・中小ホテル・レストラン・喫茶店などの経営者を意味する）、農業従事者などは平均値より下まわる。とくに、農業従事者のヴァカンスの享受が現在において著しく少なく、しかも、過去からさかのぼって減少傾向にあることが注目すべき点である。

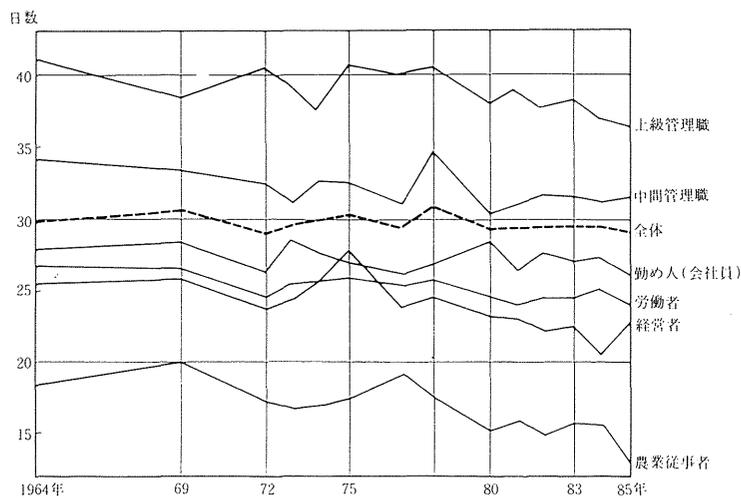
職業別のヴァカンスの滞在日数を経年的にみると、農業従事者を除いて、他のカテゴリーは、徐々に平均値に近づく傾向を示していることに特徴がある。換言すれば、フランスにおいては職業的にみて滞在日数にあまり差がみられない方向に向かっていることになる。

第4表は、居住地別にみた冬期ヴァカンスの1人あたり滞在日数について経年的に示したものである。まず最初に注目されることとして、農村コミューンと人口2万以下のコミューンに関しては、1975年以降85年までは縮小する傾向にある。それに対して、パリ大都市圏とパリ市に関しては、上記期間中、その数値は増加に向かっている。そのため、農村コミューンや人口2万以下のコミューンと、



第10図 フランスにおける冬期ヴァカンスの入込客数（1985/86年）

資料：INSEE



第11図 フランスにおける職業別に見たヴァカンスの滞在日数

資料：INSEE

第4表 フランスにおける居住地別にみた冬期ヴァカンスの1人あたり滞在日数

	1975 ^年	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85
農村コミューン	15.8	14.9	14.0	13.4	15.3	13.3	14.3	12.5	13.9	12.8	13.2
人口2万以下のコミューン	13.2	15.4	13.3	12.9	13.2	14.5	12.7	13.7	13.6	12.2	11.8
人口2万～10万	13.8	14.1	12.5	13.6	13.9	15.9	12.2	12.7	15.1	13.3	14.0
人口10万以上(パリを除く)	14.1	14.2	15.4	14.7	13.1	13.7	13.3	14.9	13.7	13.4	13.7
パリ大都市圏	14.1	15.9	14.6	15.3	13.5	13.8	14.1	14.4	14.2	14.8	15.1
パリ市	16.5	18.7	17.7	19.3	16.4	17.0	19.8	17.4	18.5	18.9	18.6
全 体	14.3	15.4	14.6	14.7	13.9	14.3	14.0	14.2	14.4	13.8	14.1

資料：INSEE

パリ大都市圏とパリ市に居住する人びとの冬期ヴァカンスの1人あたり滞在日数の差は、少しずつ開く傾向にある。

一方、農村コミューンからパリ市まで、人口集積の異なる規模の範疇に関しては、一般的には、人口集積の低い居住地の方が、その高い居住地に比較して1人あたりの滞在日数は短くなる傾向がある。しかし、農村コミューンと人口2万以下のコミューン、人口2万～10万と人口10万以上(パリを除く)などには、順位の逆転があり、人口集積と滞在日数とは、正しく比例しているとは限らない。

II-3 ヴァカンスの宿泊施設

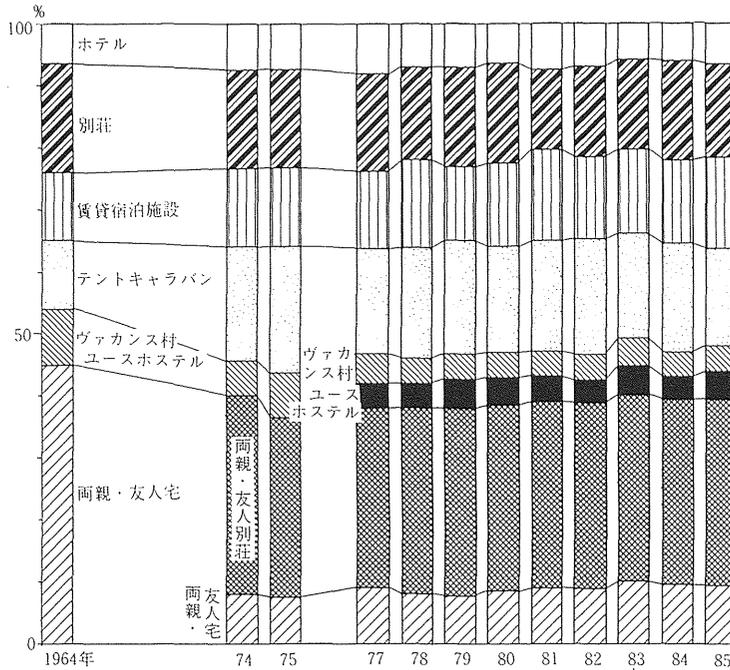
フランスにおける宿泊施設に関しては、1964年以降、両親・友人の別荘と両親・友人宅に依存する割合は、とくに1974年まで著しかった。

一方、テント・キャラバンを使用するヴァカンス享受者が増加した。1975年以降、ヴァカンスでの利用宿泊施設の大きな変遷はない。ただし、別荘で過ごす割合が高まり、1964年の10.7%から1985年の15.0%の数値が示すように、別荘所有の普及が認められる。そして、テント・キャラバンを利用する人びとは、1964年から1975年まで増大し、その流行が広まったかのように考察されたが、1977年以降、微減を続け、1985年には、15.4%になっている。同様に微減が続いているのは、ホテル利用である。フランスのようにヴァカンスの期間が長い国では、ホテルで過ごすことは少なくなりつつある。

他方、両親・友人家屋・両親・友人別荘、そして、賃貸宿泊施設、バカンス村・ユースホステルなどの範疇の割合は、1974年以降ほとんど変わっていない。

いずれにしても、フランスにおいては、両親・友人別荘、両親・友人宅でヴァカンスを過ごす割合が高い。この形態は、経済的負担を軽減していることになる。同時に、上記の宿泊施設を利用することが多くの割合を占めることは、ヴァカンス大半が国内にとどまることをも示唆している。

フランスのヴァカンスの大半は、個々人の計画によって実施されている。しかし、労働者組合やヴァカンスのための組織体による役割も大きい。社会的な観光業を進めるために、組織体が所有する休暇施設を一般に公開している。社会的な観光には、子供達のための宿泊施設(colonie de vacances)や家族に用意された宿泊施設(villages vacances familiales, VVF)も建設されている。ミッテラン政府



第12図 フランスにおける冬期ヴァカンス滞在場所の経年変化

資料：INSEE

は、老人、身体障害者、そして女性層に対して、休暇をより多く与えるような計画を促進している。したがって、フランスにおける社会的観光は、国内で大きな役割を占めるようになってきている。

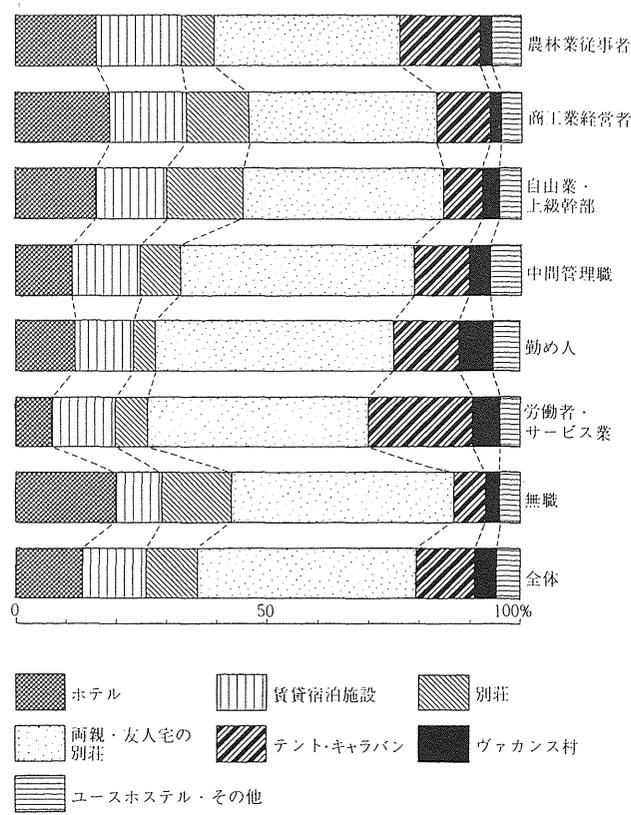
第13図は、職業別による宿泊施設を示している。職業によらず最も利用される宿泊施設は、両親・友人宅である。就中、勤め人の階層の多くは、両親・友人宅そして彼らの別荘を利用する。一方、テント・キャラバンの利用にも職業によって、大きな差異が生じている。労働者・サービス従事者は、テント・キャラバンを20%以上利用し、農林業従事者(15.3%)層も勤め人(13.5%)もそれらを多く利用している結果があらわれている。

一方、ホテル利用と別荘でヴァカンスを過ごす様相も職業によって異なっている。すなわち、ホテル利用の最も高い階層は商工業経営者(18.6%)である。そして、別荘の利用に関しては、自由業・上級幹部(15%)層が最も高く、それに商工業経営者が続く。

一般に、商工業経営者、自由業・上級幹部などの富裕者は、別荘・ホテル等の利用割合が高く、一方、勤め人、労働者、サービス業などの階層は、両親・友人宅そしてテント・キャラバンを利用する率が高くなる。このように、ヴァカンスの宿泊施設は、社会階層に応じて異なっている。

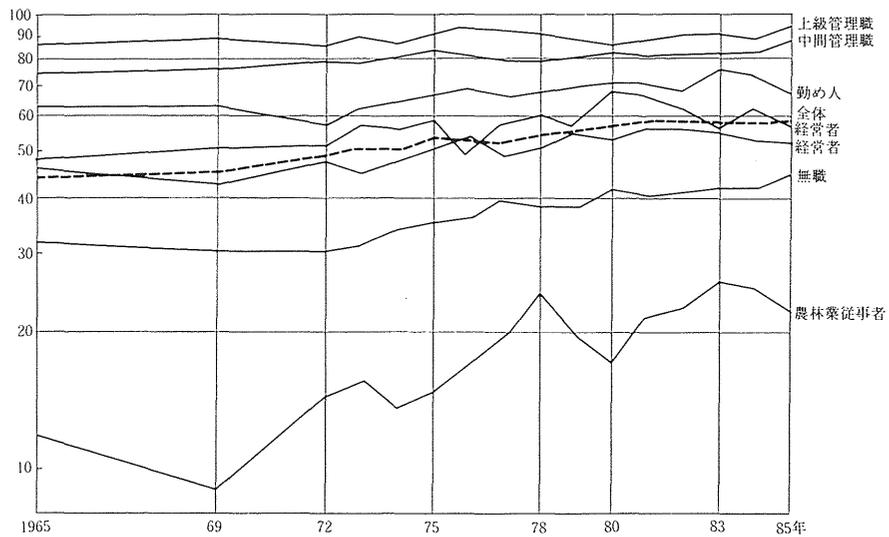
II-4 ヴァカンスの享受率の地域的差異

ヴァカンスの享受率は、年々、異なっている(第14図)。同時に、職業によっても、その享受率は大きな差異をとまなっている。とくに上級管理・中間管理層はヴァカンスの享受率は高く、前者は



第13図 フランスにおけるヴァカンス享受者の職業別による宿泊施設

資料：INSEE



第14図 フランスにおける社会・経済的職業別によるヴァカンス享受率

資料：INSEE

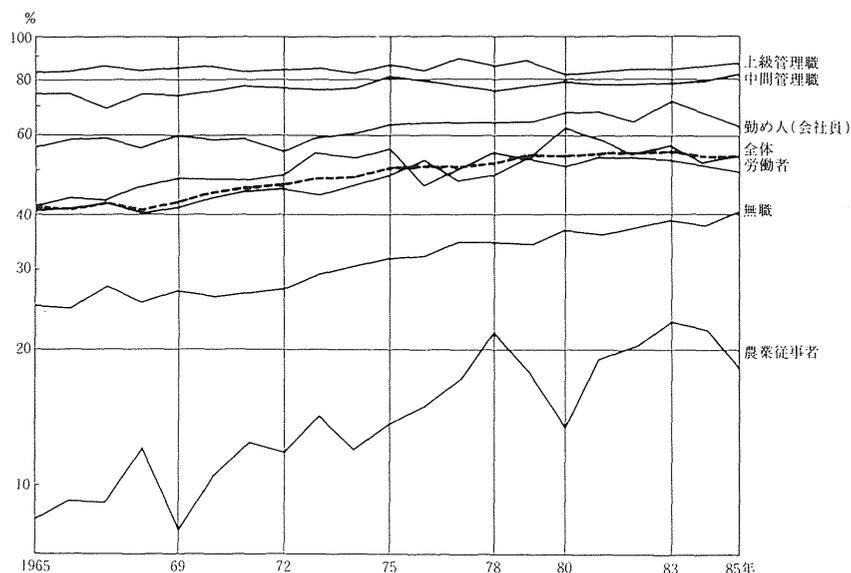
1965年には全数の60%台にとどまっていたが、1985年には90%を越えるようになった。同じように、中間管理層は、1965年には60%台であったが、上記の期間に80%台になった。上記両カテゴリーは増加傾向にあるが、年々わずかな差異が生じており、ヴァカンスも経済の状況を敏感に受けている。たとえば、1970年代中頃のオイルショックによる不況は、ヴァカンスの享受率にもわずかな影響が生じている。

一方、農林業従事者は、他の職業に比較して、ヴァカンスの享受率が著しく少ない。1965年から85年にかけて、それは増加傾向にありながら、数年間ごとに増減が著しく異なり、1985年の時点では、わずかに20%を越えるに過ぎない。近年、フランスの農林業就業者数は急速に減少しているが、ヴァカンスの享受機会が少ないことも、若年層の農林業への就業を低下させている要因とも考えられる。長い期間を考えると、社会的な階層のひらきは縮まりつつあるが、近年、富裕層（管理職）と非富裕層（労働者・農林業従事者）には差異がはっきりするようになってきた。

第15図と第16図は、それぞれ夏期と冬期のヴァカンスの享受率の経年変化を表示している。夏期のヴァカンスの社会・経済的職業別享受率は、通年のヴァカンス動向とほぼ同様である。一方、冬期ヴァカンスは新しい現象であり、あらゆる階層においても増加傾向にある。

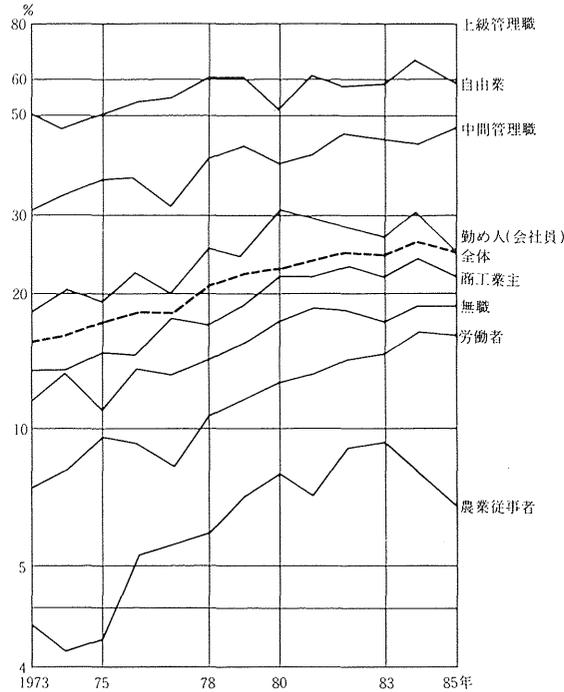
職業別にみると、上級管理・専門的な自由業層が最上部に位置し、1973年から1985年にかけて、50～70%に達し、フランスの富裕層における冬期ヴァカンスの普及の顕著さがうかがえる。第2位に位置している職業グループは、中間管理層であり、1985年に至ってほぼ50%に達するほど普及している。

一方、冬期ヴァカンスがまだまだ十分に普及していない階層がある。農林業従事者層は、最下位に位置している。1974年から1980年まで冬期ヴァカンスへの参加が急速に増加し、1980年から81年に減少



第15図 フランスにおける職業別による夏期ヴァカンス

資料：INSEE



第16図 フランスにおける職業別による冬期ヴァカンスの享受率の変遷

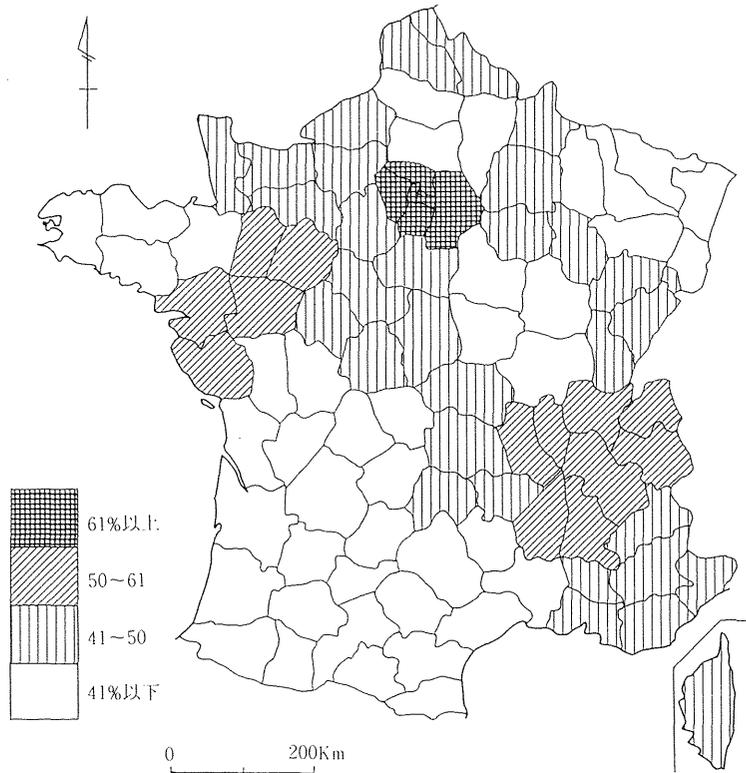
資料：INSEE

したが、再び増えて、81年から83年に増加し、10%近くに達したが、1983年以降は再び減少傾向にある。

フランス国内において地方別にみて、夏期ヴァカンスの享受率が異なることを考察してみたい。1977年の時点において、イル・ドゥ・フランス地方の人びとの実に80%がヴァカンスを享受している。ヴァカンスの享受に関しても、イル・ドゥ・フランス（旧名称：パリ地方）が中心である。

夏期ヴァカンスを享受する割合が、50%を越えるのは、イル・ドゥ・フランスを除いて、ローヌ・アルプ（56.9%）とペイ・ドゥ・ラ・ロアール（51.1%）の両地方のみである。上記の分布パターンは、ローヌ・アルプとペイ・ドゥ・ラ・ロアールの両地方を結ぶ線の北東部に概して高率地域に存在することに特色をもつ。フランスの都市化や工業化が論じられるとき、フランスの南北性や東西性が問題となる。各地方のヴァカンスに関する享受に示されるパターンも、上記両者の特色と一致する。すなわち、ヴァカンスの享受の程度は、それぞれの地域の都市化・工業化段階に一致し、フランスの地域構造に潜む基本的なものを表出している。

第18図は、同じように夏期ヴァカンスの地方別享受率を1985年時点で示している。1977年時点のものと同分布パターンは、基本的には異なることはないが、傾向がより鮮明になっている。まず第1に、イル・ドゥ・フランス（77.6%）の優位性は維持されている。上記の享受率が50%以上の地方は、オート・ノルマンディー、サントル・ペイ・ドゥ・ラ・ロアール、ローヌ・アルプそしてオーヴェルジュの諸地方であり、イル・ドゥ・フランスを除いて5地方である。これらの高率地方は、ペイ・ドゥ・



第17図 フランスにおける地方別夏期ヴァカンスの享受率（1977年）

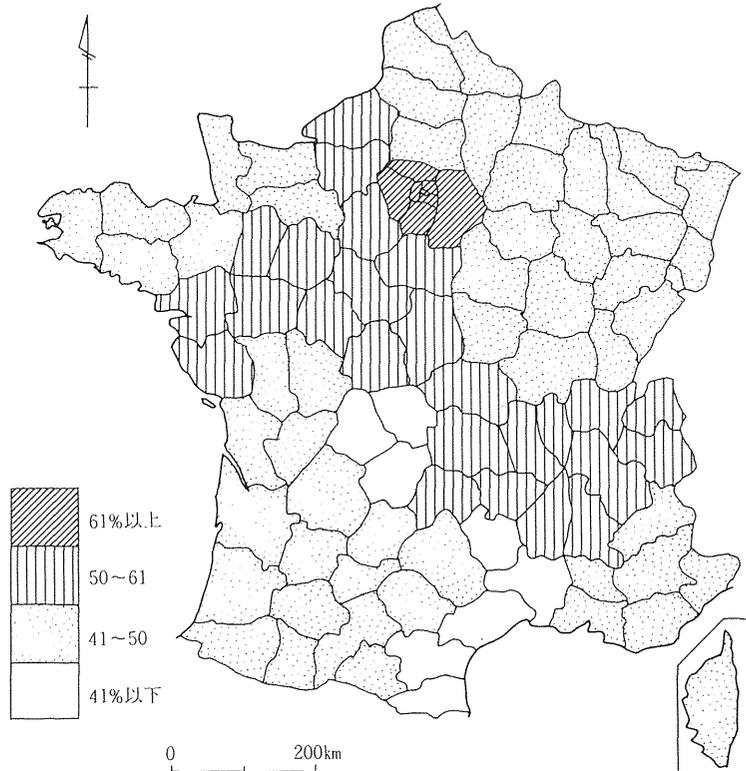
資料：INSEE

ラ・ロアール地方とローヌ・アルプを結ぶ地帯に集中している。一方、低率地方は、リムザンとラングドック・ルシオンの両地方である。

第17、18両図が示すように、夏期ヴァカンスの享受者率の地域的パターンは、年々、南北性と東西性を鮮明に浮き彫りにしている。すなわち、フランス国内では、ヴァカンス享受者が南より北部、西より東部に集中し、イル・ドゥ・フランスが特出している。この様相は、西ヨーロッパ内での観光業の周縁部・核心部の現象とともに、フランス国内にも存在していることと云えよう。

次に、冬期ヴァカンスの享受率の地方別分布パターンを知るために、第19図と第20図を得た。1977～78年時点での冬期ヴァカンスの享受率をみても、イル・ドゥ・フランス（35.1%）の卓越性は変わらない。イル・ドゥ・フランス以外で享受率が20%を越える地方は存在せず、享受率が10%を越す地方は、15地方存在し、その分布状況を見ると、三つのグループに分けられる。まず第1は、イル・ドゥ・フランスとそれを囲むサントルとオート・ノルマンディーの両地方である。

第2のグループは、アルプス山脈に近いフランシュ・コンテ、ローヌ・アルプそしてプロヴァンス・アルプ・コートダジュール、コルシカ島である。これらの地方は冬期スポーツの一大拠点であるアルプス地方に近接しているため、高率を示すものと考えられる。



第18図 フランスにおける地方別夏期ヴァカンスの享受率 (1985年)

資料：INSEE

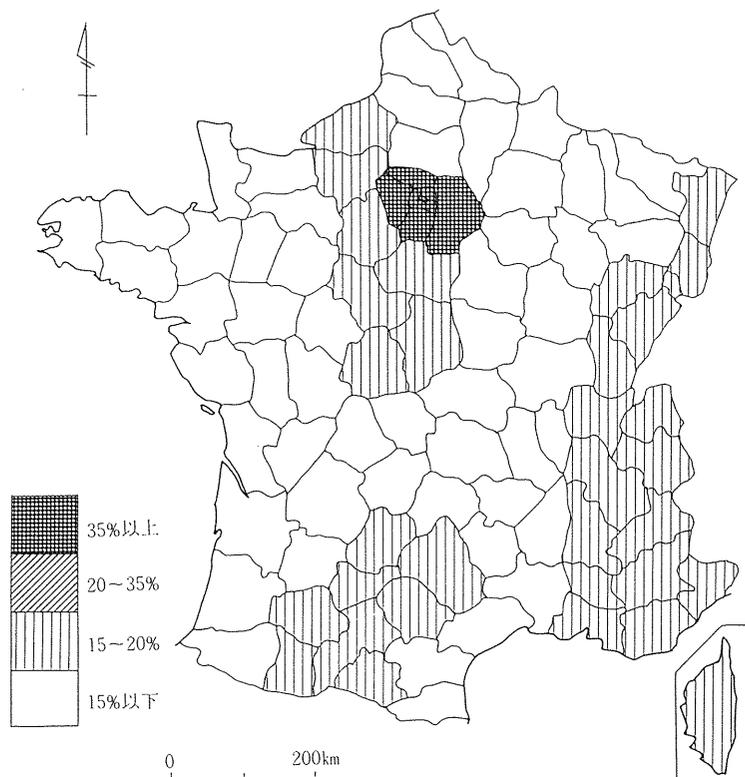
第3のグループは、ミディ・ピレネー地方であり、この地方も、冬期スポーツの拠点であるピレネー地方に近接しているために、高率を示していると思われる。

1985~86年にかけてのフランスにおける地方別冬期ヴァカンスの様相は、第20図が示している。1977~78年の全国平均値が17.9%であったものが、1985~86年にかけて24.9%に達したことから理解されるように、冬期ヴァカンスはフランス国内で広く普及するに至っている。

1985~86年時点で、享受率が低く10%台でとどまっているのは、ノール、ロレーヌ、ポワトゥー・シャラント、リムザンそしてオヴェルジュの5地方である。これらの地方は、アルプス、ピレネー両山脈に対しても近接性が低い。

別荘の全家屋に占める割合は、第21図に示されている。別荘が集中する地域には3つのタイプが存在する。第1には山岳地域であり、アルプス山麓の諸県が典型的である。その他、ピレネー山脈の位置するルシヨン県もこのタイプに属する。中央高地に位置するオート・ロアール、ロゼーヌそしてアルディッシュなどの諸県にも別荘の割合が高い。

第2のタイプは、海岸に位置する諸県である。地中海沿岸のヴァール県やアルプ・マリタイム県での別荘率は高い。カンヌからイタリア国境までは、コートダジュールとよばれ、とくにニースからイ



第19図 フランスにおける地方別冬期ヴァカンスの享受率 (1977/78年)

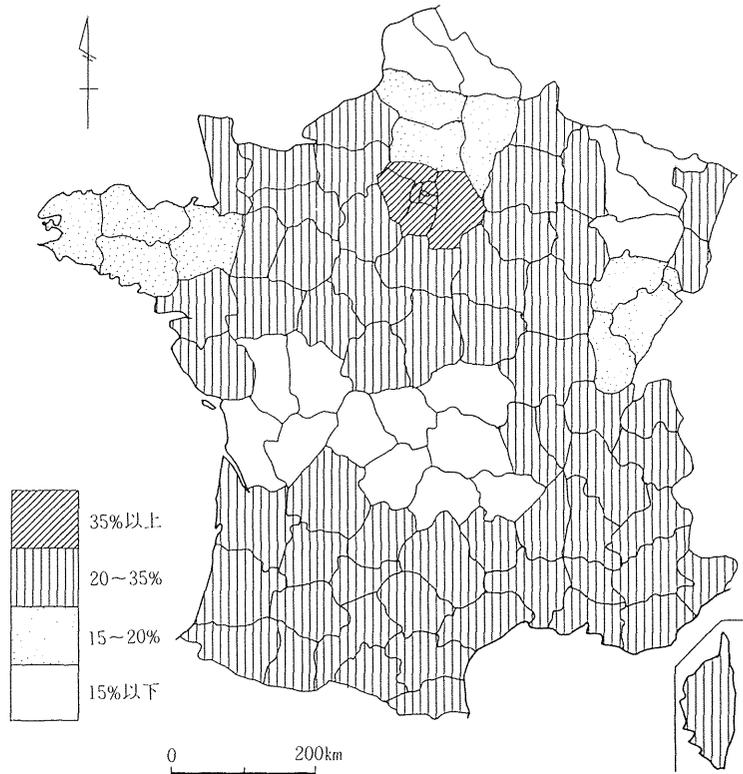
資料：INSEE

タリア国境まではリヴィエラ (Riviera) と名づけられており、全フランス内でも別荘が集中している地域である。この地方は、夏には乾燥して日照時間が長い、海洋の影響を受けて暑すぎることはない。一方、冬は温暖であり、海岸の背後には山岳が存在するため、とくにミストラルという局地風を防ぐ位置にある。コートダジュールの開発は、19世紀後半に鉄道の敷設によって国際的な観光地となり、とくに冬の休暇地として、初期の段階では重要であった。しかし、現在では夏期ヴァカンスが中心になるように、当地の役割が変遷した。

一方、海岸部での別荘は、ビスケー湾に面するヴァンデ県やシャラント・マリタイム県にも集積している。

第3のタイプは、内陸部に位置するが、田園的な環境によって、別荘を引きつけているイヨンヌ県やニエヴル県、そしてクリューズ県などがある。現在フランスにおいては、自宅と夏期・冬期ヴァカンス用の別荘に加えて、週末のための第2の別荘が普及し始めている。その立地は、とくにパリを中心とした地方にみられる。多くの事例として、挙家離村した農家を都市住民が購入して、内部を改装するものである。このような複数別荘所有が普及しつつある。

フランスには観光資源が多い。パリやあるいはロアール川の歴史・文化的遺跡にはじまり、地中海



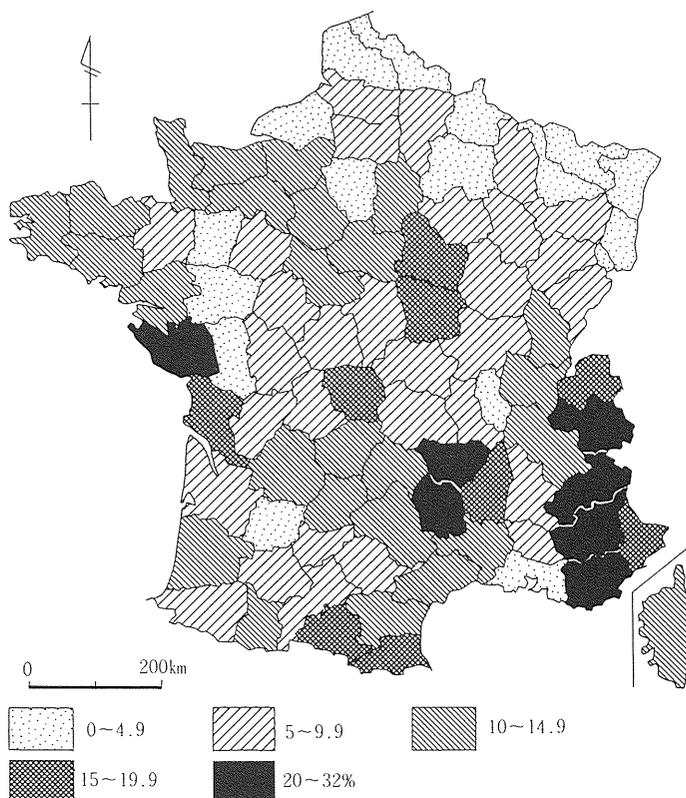
第20図 フランスにおける地方別冬期ヴァカンスの享受率（1985/86年）

資料：INSEE

沿岸のニースやサントロップなどのリゾート地があり、冬期にはアルプスやピレネー山脈での冬季スポーツも楽しめる。そのため、外国人の別荘も増加しつつある。たとえば、ラングドック・ルシオンを例にとれば、全家屋の4.4%が外国人による別荘によって占められ、面積にすると、5万haに達する。フランスに別荘をもつのは、とくにオランダ、ベルギー、そしてドイツ人などである。

1973年から76年の間に、外国人によって購入されしかも常時居住していない家屋は、13,605家屋に達した。それらの国内での分布は、ローヌ・アルプに4,698、プロヴァンス・コート・ダジュールに2,275、ラングドック・ルシオンに1,948、アキテーヌに1,728、パリ地方に766、アルザスに421、その他のフランスに1,769件となっている²⁾。フランスの地価はヨーロッパにおいて相対的に安価なため、他の西ヨーロッパ諸国の人のびとの別荘投資が進むものと思われる。

第22図は、外国人所有による常住していない別荘の分布図である。本図は国内全体の別荘の分布図（第21図）に類似している。すなわち海岸、山岳地帯、田園地帯に外国人の別荘が立地する。それに加えて、著しい特色は、パリ市とその周辺部に集中していることである。さらに、アルザス地方からロレーヌ地方にかけての国境沿いにも別荘の分布が多くみられる。



第21図 フランスにおける全家屋に占める別荘の割合（1975年）

資料：INSEE

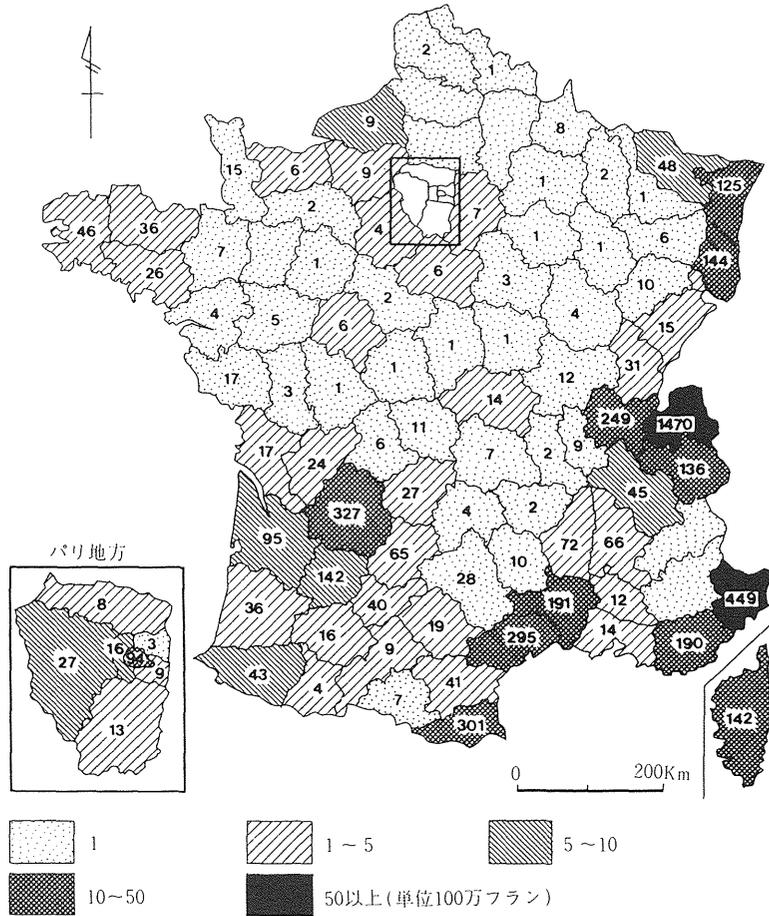
Ⅲ フランス人の外国でのヴァカンス

Ⅲ-1 外国におけるヴァカンス

フランス人が外国でヴァカンスを過ごすようになったのは、1945年以降の現象であり、その後、フランスの社会・経済的環境に応じて外国でのヴァカンス形態は異なってきた。フランス人が外国で支出する費用に比べると、外国人がフランスに流入して使用する金額の方が多い。すなわち観光業の支出決算に関しては、黒字であり、この傾向は1970年代以降変わらぬ傾向である。

1980年初頭においては、フランスは多数の外国人観光客を迎え入れ、世界でも観光客の流入の最も多い国の一つにあげられている。外国からの観光客は、西ヨーロッパからのものが約85%を占めており、国別ではドイツ、ベルギー、オランダそしてイギリスからが約70%を占めている。上記の諸国とは、道路網やフェリーで直結しており、フランスは西ヨーロッパにおいては近接性の高い位置におかれていることは勿論のこと、多数の外国人を迎え入れるにふさわしい観光資源を有している。

北アメリカからの流入は、全体量の5%にしか達せず、ヨーロッパ回遊観光の一部としてフランスを訪れる場合が多い。外国人の観光者の半数以上が、6・7・8月に集中し、フランス国内でのヴァ



第22図 外国人による別荘取得 (1974年)

資料：INSEE

カンス客の混雑さに、さらに拍車をかける結果となっている。しかし、ドイツ人の第2のヴァカンス先として、フランスが選ばれる傾向にあり、夏期ヴァカンスの混雑緩和に一助となりつつある。

第5表は、夏期と冬期に分けて、フランス人がいかなる国でヴァカンスを過ごしているかを表している。両期とも西ヨーロッパの諸国にとどまる割合が高く、夏期の76.7%と冬期の64.0%が示されている。とくに夏期には、スペイン（アンドラを含む）・ポルトガルそしてイタリアの3カ国で49.6%となり約半数に至る。夏期には西ヨーロッパのうち、西ドイツ、オーストリア、イギリス、ギリシアなども高率を占めている。西ヨーロッパ以外では、北アフリカも高い割合を占めるのに注目したい。アルジェリア、モロッコ、そしてチュニジアのマグレブ3国は、合計して14%を越えており、この集中は、冬期においても同様である。

冬期のヴァカンスの様相は、夏期と多少異なっている。西ヨーロッパに集中するものの夏期に比較してその程度は低い。西ヨーロッパの中でも、避寒地として選ばれるスペイン・イタリアなどには、

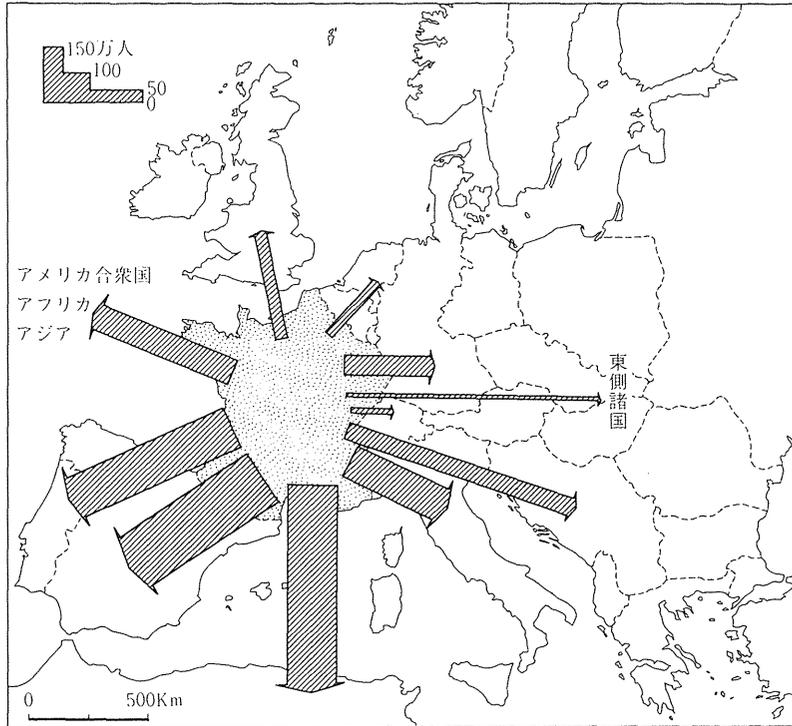
第5表 フランスにおける夏期・冬期ヴァカンスの外国への滞在

1984～85年 冬期		1985年 夏期
	%	%
スペイン(アンドラを含む)	15.8	23.0
ポルトガル	3.8	13.0
イタリア	10.9	13.6
スイス	5.4	3.4
西ドイツ・オーストリア	11.9	8.8
ベネルックス	4.8	2.2
スカンジナビア・フィンランド・ アイスランド	0.4	0.5
イギリス	8.6	5.6
ギリシア	2.1	5.4
トルコ	0.3	1.2
西ヨーロッパ合計	64.0	76.7
ユーゴスラビア	1.1	2.4
ソ連・東ヨーロッパ	4.2	1.4
東ヨーロッパ合計	5.3	3.8
アルジェリア	2.6	3.9
モロッコ	5.8	5.5
チュニジア	6.0	4.7
北アフリカ合計	14.4	14.1
その他のアフリカ諸国	7.5	1.5
アジア諸国	2.0	0.9
中近東(イスラエル、レバノン)	1.4	0.5
アメリカ合衆国	3.5	1.4
カナダ	—	0.4
その他合計	14.4	4.7
南アメリカ	1.4	0.3
中央アメリカ(メキシコ)	0.5	0.4
滞 在 の 合 計	2,240,000	6,017,000

資料：INSEE

多くの人びとが訪問し、一方、冬期スポーツとして西ドイツ・オーストリアなどが選ばれている。その他、前述の通り、避寒地としてかつての植民地であったマグレブ諸国とともにその他のアフリカ諸国にも高い割合がみられる。

フランス人がヴァカンス中にいかなる国で滞在するかに関しては、第23図が示している。前述の第5表で理解できるように、夏期ヴァカンス客が冬期ヴァカンス客をはるかに上まわっており、そのため本図は夏期ヴァカンスの傾向に類似している。この流動図が表現しているように、フランス人のヴァカンスを地域的に分析すると、フランスから南下する傾向にある。スペイン・ポルトガル、アルジェリア・モロッコ・チュニジア、イタリア、そしてユーゴスラビア・ギリシア・トルコ・イスラエル・



第23図 フランス人によるヴァカンス中の国外での滞在先（1985年）

資料：INSEE

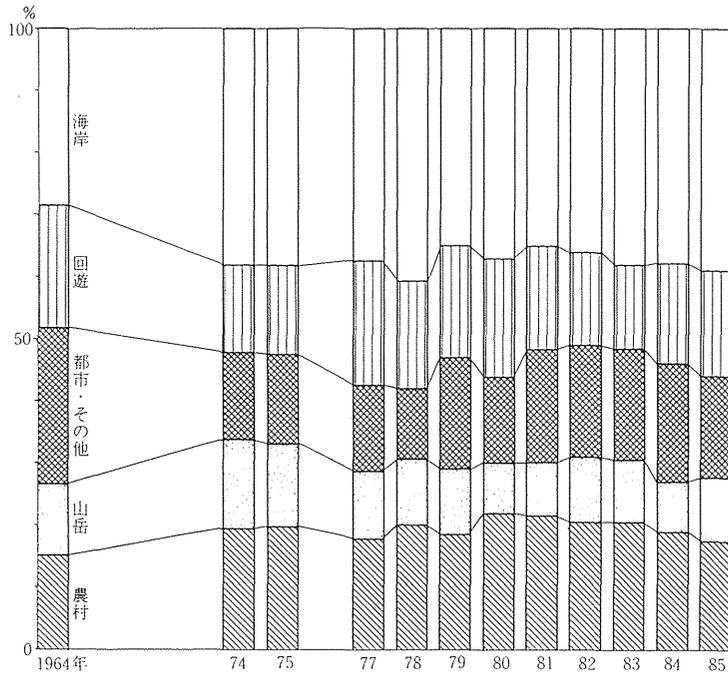
レバノン諸国を合計すると、全体の75.1%に達する。この南下現象は西ヨーロッパとその周辺地域へ移動することであり、当地域内の核心部・周縁部現象を如実に表現しているといえよう。

Ⅲ-2 外国における滞在場所

フランス人による外国でのヴァカンスは増加する傾向にある。第24図は、外国でのヴァカンス中にいかなる場所が選択されるかが経年的に示してある。本図の中では、まず第一に、海岸部に滞在する割合が年々増える傾向にある。1964年には、海岸部に滞在する割合は28.6%であったが、1985年に至って38.5%に達するようになった。第23図と第24図を重ね合わせると、フランス人は自国から南下し、主として海岸部に滞在するようなヴァカンスの形態が主流であるといえよう。

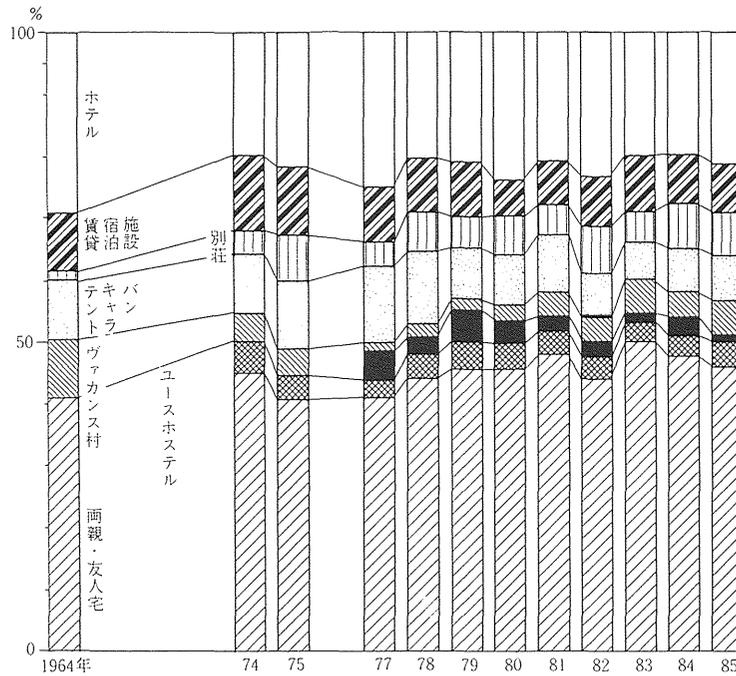
一方、農村部に滞在する割合は、1964年から80年まで増加する傾向にあったが、近年には再び20%を下まわるようになった。日本人は休暇中に回遊形態をとるが、フランス人はその割合は比較的少ない。1964年には19.7%であったが、1985年には17.1%であり、フランス人のヴァカンスの主流は、滞在型であることがわかる。

フランス人が外国でのヴァカンスでいかなる宿泊施設を利用しているかに関して、第25図が表示している。図からも明白なように、両親・友人宅そしてそれに加えて両親・友人の別荘が1985年には49.3%に達し、約半数を占めている。一方、ホテルの利用は1960年代以降減少傾向にあり、賃貸宿泊



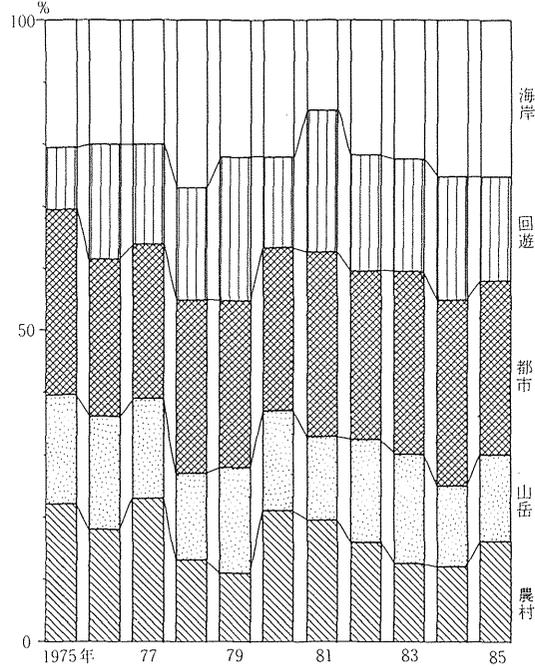
第24図 フランス人による外国におけるヴァカンスの滞在場所の経年変化

資料：INSEE



第25図 フランス人の外国におけるヴァカンス中の宿泊施設

資料：INSEE



第26図 フランス人の外国における冬期ヴァカンスの滞在場所の経年変化

資料：INSEE

施設はもともとわずかであったが、さらに縮小しつつある。ホテル利用は国内外ともに高額所得者による傾向が強い。このように、フランス人の外国でのヴァカンスの滞在は、費用の余りかからない形態が主流を占めつつある。他方、他国での別荘所有は、1964年にはわずかに1.4%であったが、1980年代以降その割合が増加し、1985年には7.0%に至っている。前述したように他国人がフランスに別荘を所有する傾向が強まる動向を背景として、フランス人もまた外国に別荘を所有するようになっていく。このように、西ヨーロッパの中では、国境を越えた別荘所有が徐々に進み、居住のマルチハビテーションとともに、ボーダレスな様相が生じつつある。

フランス人の外国における冬期ヴァカンスがいかなる場所でなされているかを経年的に表出したのが第26図である。回遊しながらのヴァカンスが1981年には22.7%に達し、その後わずかに減少しつつある。最も卓越した形態は都市での滞在であり、1984年には30%を越えていた。第二番目に多い場所は、海岸部であり、1975年以降、微増を続けている。逆に、減少傾向があるのは、農村部と山岳地帯であり、この結果をみる限り、フランス人の外国でのヴァカンスは、都市的な地域を嗜好しているように思える。

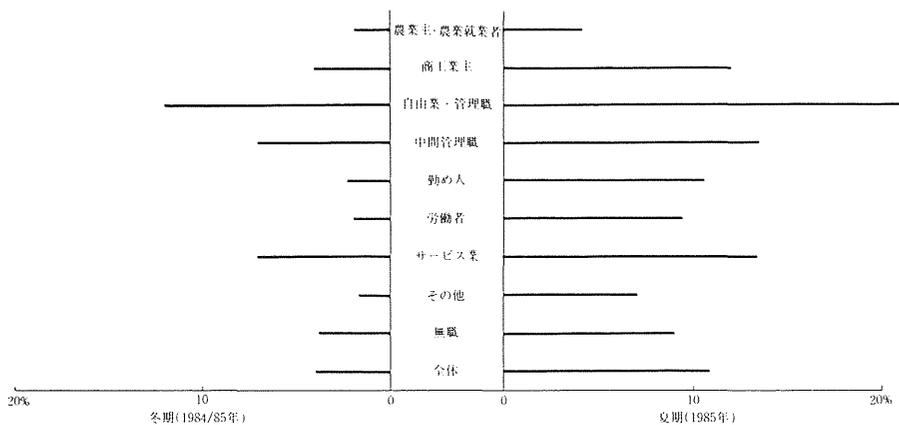
フランス人の外国でのヴァカンスの滞在場所と宿泊場所をクロスさせたものが、第6表である。その結果は本表からわかるように、多様性に富んでいる。ただし、宿泊場所ではホテルと両親・友人の家屋の両方で69.8%を占めているのが特徴的である。ホテルを宿泊場所と定めたものは、回遊するか海岸部に滞在することが多い。両親・友人の家屋に宿泊するものは、都市・農村そして海岸部を選ぶ

第6表 フランス人の外国でのヴァカンスの滞在場所と宿泊場所（1985年）

(単位：%)

	回遊	海岸	山岳	農村	都市	全体
ホテル	13.4	13.1	3.7	0.6	4.3	35.1
賃貸宿泊施設	0.4	5.0	1.9	0.1	0.2	7.6
別荘	0.1	1.7	0.5	1.4	0.4	4.1
両親・友人の家屋	1.2	9.6	3.1	10.3	10.5	34.7
両親・友人の別荘		1.7	0.6	0.5	0.5	3.3
テント・キャラバン	3.5	2.6	0.9	0.1	0.2	7.3
その他	2.1	2.4	0.8	0.7	1.9	7.9
合計	20.7	36.1	11.5	13.7	18.0	100.0

資料：INSEE



第27図 フランス人の職業別による外国でのヴァカンスの享受率

資料：INSEE

傾向が強い。統計をみると、滞在場所として、海岸部、回遊そして都市部が多く、この3者を合計すると、約4分の3に相当する。滞在場所と宿泊場所を組み合わせると、回遊しながらのホテル宿泊が、13.4%で最も高率を示し、海岸部に滞在してホテル宿泊が13.1%になり、ついで都市に滞在して両親・友人の家屋に宿泊する者が続く。

III-3 外国におけるヴァカンスの諸相

当然のこととして、前述の通り、ヴァカンスの享受率は、職業に応じて異なっている。第27図は、夏期と冬期に分けて職業ごとのヴァカンスの享受率が大きく異なることを表現している。職業ごとの差異は、冬期に比較して夏期に著しい。両期とも、自由業・管理職に従事している階層が高い割合を示している。とくに、自由業・管理職層は、夏期ヴァカンス中に外国へ出国する割合が21.2%に達している。この層での外国ヴァカンスの普及状況は注目すべき高率である。その他、夏期に外国でヴァ

カンスを享受する者が多いのは、中間管理職・サービス業そして商工業主などである。サービス業や労働者層にも比較的高率を示すのは、フランスに労働者として入国している階層や移民が、定期的に出身国へ帰国する状況が反映されているからである。一方、冬期には、サービス業に従事する者そして中間管理職などが平均値（4.1%）を越えている。夏期に外国でヴァカンスを享受する者は、全体の10.8%であり、冬期では4.1%にすぎない。しかし、ヴァカンスを外国で過ごす傾向は高まりつつある。また、外国でのヴァカンス滞在は、平均すると国内での滞在より長期化しており、1984～85年の冬期には12日以上になり、1985年の夏期には約22日間に達している。

Ⅳ む す び

本稿は、世界でもヴァカンス先進国であるフランスを事例にして、そこでのヴァカンスを出来る限り多方面から解明しようとするものである。明らかになった事実は、以下の通りである。

1. フランス人のうちヴァカンスを享受する割合は、年々増加する傾向にあり、ヴァカンスが人びとの間に浸透しつつあることがわかる。1985年にはフランス人の約60%がヴァカンスを楽しみ、1人あたりの滞在日数は約19日間である。また同時に、冬期スポーツの普及によって、冬期ヴァカンスも広まり、1年に2回のヴァカンスを享受する傾向が生じている。ただし、現在のところ、ヴァカンスは一年間のうちで7、8月に集中し、この様相は外国でのヴァカンスの滞在についても同様である。

2. ヴァカンスの享受率は、所得額に応じて異なり、所得額が高まればその享受率は高まる。また、職業別にも当然、滞在日数が著しく異なる点にも特色がある。とくに管理職・中間管理職は全体の平均値を上まわり、一方、農業従事者のヴァカンスの享受は著しく少ない。

3. ヴァカンスを享受する年齢層をみると、30～39歳層が中心になり、家族単位のヴァカンスが主体であることがわかる。またヴァカンスを享受する年齢層も高まり、高齢者層の割合も高まる傾向にあり、高齢化社会がヴァカンスにも反映している。

4. ヴァカンスの滞在所に関しては、海岸部が多く、それに農村部・山岳部が続く、一方、回遊の割合が低く、「滞在型」の休暇が主体である。

宿泊する場所は、両親・友人の家屋が最も多いが、所得が高い層には別荘の所有が普及している。一方、ヴァカンスの長い歴史を有するフランスでは、ホテルでの宿泊が相対的に低いことがわかる。

5. 夏期ヴァカンスにおいて、入込客が集中するのは、地中海沿岸、ビスケー湾沿岸そしてイギリス海峡に面した沿岸、それに加えてアルプス山麓のような山岳滞在型も存在する。一方、冬期ヴァカンス入込客の大多数は、オート・サヴォア県からジロンド県にわたる東西に引かれる線の南側に集中する。それにアルプス山麓とピレネー山脈にも入込客が多い。

6. フランスにおいて、ヴァカンスを享受する割合が高いのは、イル・ドゥ・フランス地方を中心として、フランス国内の南北性・東西性が存在する。すなわち、ヴァカンスを享受する人口は、南より北部に集中し、西より東部に集中する。このパターンは、都市化・工業化段階と一致する。そして西ヨーロッパ内部における観光業の周縁部・核心部の現象とともに、フランス国内にも上記の現象がみられる。

7. フランスには、観光資源が豊富なため、外国人所有の別荘が増えつつある。その分布の中心は、パリを中心としたイル・ドゥ・フランス地方であり、その他はフランスの別荘所有地と類似して海岸部や山岳部である。他方、フランス人が外国に別荘を所有する傾向もあり、別荘所有が国境を越える事象が生じつつある。

8. フランス人が海外でヴァカンスを過ごすことも、近年、顕著なことである。出国先は、スペイン・ポルトガル・イタリア、そしてマグレブ諸国などであり、フランス人のヴァカンス中の南下現象に特色がある。このことは西ヨーロッパ内に存在する核心部・周縁部現象を如実に表出している。

謝 辞

この小論を平成3年3月に退官された山本正三（筑波大学名誉教授，現獨協大学教授）先生に謹呈いたします。製図は宮坂和人氏に依頼しました。

注

- 1) 内閣総理大臣官房審議室編(1970)：観光の現代的意義とその方向，p.13. 2) J.-L.Michaud (1983) : Le tourisme face à l'environnement, p.104.

参 考 文 献

- M.Boyer (1982): Le tourisme, 283p.
 J.-L.Michaud (1983): Le tourisme face à l'environnement, 234p.
 G.Cazes (1984): Le tourisme en France, 125p.
 G.J.Ashworth (1984): Recreation and tourism, 96p.
 P.E.Murphy (1987): Tourism a community approach, 200p.
 A.Mesplier (1987): Le tourisme en France, étude régionale, 381p.
 M.Christine et C.Samy (1987): Les vacances des français en 1985, 93p.
 B.G.Boniface & C.P.Cooper (1987): The geography of travel and tourism, 222p.
 D.Pearce (1987): Tourism Today : a geographical analysis, 229p.
 小池洋一・足羽洋保編著(1988)：観光学概論、399p.
 G.Wackermann (1988) : Le tourisme international, 279p.
 C.Ryan (1991): Recreational Tourism, A social science perspective, 227p.

L'analyse géographique des vacances en France

par Nobuo TAKAHASHI

Cet article essaie d'élucider la structure des vacances en France au point de vue géographique. Les conclusions que l'on peut tirer de cette étude peuvent se résumer brièvement de la manière suivante.

1. Le taux de départ en vacances de la population résidant en France augmente régulièrement. Le taux de départ en vacances était d'environ 60% par rapport à l'ensemble de la population, tandis que la moyenne de séjour était de 19 jours par personne. Par ailleurs, en raison de la diffusion des vacances d'hiver, les Français ont tendance à prendre des vacances deux fois par an.

2. Le taux de départ en vacances correspond au montant des revenus, ainsi qu'à la hiérarchie des catégories sociales. Ce sont les cadres supérieurs et les Français occupant des professions libérales qui partent le plus souvent en vacances, tandis que les agriculteurs ont le taux le plus faible.

3. Lorsqu'on est jeune, l'on a tendance à partir plus souvent en vacances, notamment lorsque l'on est âgé entre 30 et 39 ans, ou moins de 14. Mais en même temps le taux de départ de la population âgée augmente peu à peu.

4. Le séjour des vacances à la mer reste la plus prisée. Les voyages à la campagne maintiennent leur deuxième place, tandis que ceux à la montagne se positionnent à la troisième place. Les vacances circulantes restent faibles, en revanche, l'on aime séjourner à la même place.

5. Les vacanciers français optent pour deux types de séjour. Premièrement, les séjours dans les régions côtières, telles la mer Méditerranée, l'Océan Atlantique et la Manche, tandis que les séjours à la montagne dans les provinces des Alpes et des Pyrénées occupent le second rang.

6. La répartition des vacanciers français se concentre géographiquement dans la partie septentrionale du pays, plus que dans celle du Midi, tandis que la partie orientale s'avère plus populaire que celle de l'Ouest. Cette tendance correspond au degré d'urbanisation et d'industrialisation.

7. Présentement, le nombre de résidences secondaires possédées par des étrangers augmente en France surtout dans la région de l'Île de France. Toutefois les Français aussi se construisent des résidences secondaires à l'étranger, ce qui revient à dire que la propriété de résidences ne connaît pas de frontières pour les français et les étrangers.

8. Maintenant la part des séjours à l'étranger est importante. Les pays enregistrant la plus forte affluence touristique venant de France sont l'Espagne, le Portugal, suivie des pays de l'Afrique du Nord (Algérie, Maroc, Tunisie) puis de l'Italie. Les Français ont tendance à sejourner de plus en plus dans les régions du sud. Le phénomène démontre qu'il y a une opposition entre les principales nations de l'Europe occidentale et les pays d'importance secondaires de cette même région.